

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.46
平成25年9月1日

めざすは「衆人愛敬」

会長 藤本 圭佑

6月1日、アフリカ開発会議(TICAT)が横浜市MM21地区で始まった。たまたま同日付新聞でアフリカ出身初の関取大砂嵐金太郎さんが紹介されるなど、話題が重なりアフリカを急に身近に感じた。

また、同日紅葉ヶ丘の能楽堂では第61回横浜能が開催された。大勢の人で見所が賑わうなか、アフリカからの遠来の客も見受けられ、日本の古典芸能・能楽のグローバル化を肌で実感した。

これこそ、世阿弥の言う「衆人愛敬」(風姿花伝第五奥儀)つまり、能が多岐の人に愛されること、究極の姿ではなからうか。

6月6日第2回理事会で「横浜音祭り2013」の連携イベントに応募することについて話し合った。

横浜能楽連盟規約には「能楽の普及発展に資する」とある。

五流能楽大会など自主事業はどちらかと言えば、会員中心の内向きであったが、これからは広く市民に公開して多くの方々に能楽堂で直に能楽を鑑賞していただく、外向き志向がまさしく目的に合致するとの観点からイベントに参加することになった。

このイベントのコンセプトは、「市民参加・次世代の育成・賑わいづくり・経済の活性化・世界水準の文化芸術の発信」で、公式ホームページによる情報発信、公式情報誌への掲載など広報の協力が得られる。しかし参加する側にはツイッター・フェイスブックのフォローが必要となる。馴染みがなく苦手の分野ではあるが、7月の参院選にもインターネット運動が解禁されるなど、身の回りでIT旋風が吹き荒れている。もはや一人圏外にいることはできない。結果はともかく初めての試

み、連盟一丸となり英知を結集しつつ、能楽堂のご助力を頂きながら挑戦することにした。

能楽連盟は発足以来67年となる。会員数は、昭和23年 93名に始まり平成8年には能楽堂の完成、さらには平成20年能楽がユネスコ無形文化遺産に登録されるなどの追い風に恵まれている。現在435名である。追い風といえ、このたび富士山が三保の松原とともに世界文化遺産に登録された。能楽愛好者にとって天にも昇る快事といえる。

素晴らしい能楽堂に恵まれ、五流揃つての活動が出来る幸運をエネルギーにして未来に向けて能楽を普及・発展させたい。魯迅の「もともと地上には道はない。歩く人が多ければ、それが道になる。」をひたすら念じ、衆人愛敬をめざして一歩一歩進まねばとの思いを強くしている。

連盟報告

(平成24年度後期)

企画事業担当 青山圭佑

一、主催の「第16回五流のつどい」は平成25年2月16日(土)に当番幹事観世流により開催されました。(別稿「五流交流のつどい」参照)

新企画として国学院大学観世会の仕舞3番の出演が行な

われしました。また学生達の昼食時に会長並びに「つづき謡曲会」の長谷川理事、連絡担当の伊藤重章氏が同席し懇談を行ないました。



二、会員数

平成25年4月1日現在の会員数481(個人435名、団体企業46)。会員の減少が続いておりましたが、金春流が20名、喜多流と観世流が各8名、金剛流が3名の増加となりました。

会員の高齢化による減少は続くと考えられますが、今後とも会員の皆様の勧誘への努

力に期待いたします。

川崎の能楽謡曲連盟は川崎能楽堂にて年4回定例会が行なわれております。観世流のみで初めは川崎市内の有力企業の謡曲愛好者が、各社中毎に出演曲目により素謡会として運営しておりましたが、白謡会の参加により、仕舞も番組に取り入れられております。また素謡には参加の人達が希望曲目の地謡に出演が出来る方式となっております。横浜能楽連盟にても、今後参考にされても良いかと考えます。

第16回

「五流交流のつどい」

観世流 青山圭佑

平成25年2月16日(土)に第16回「五流交流のつどい」が開催されました。

この日の出し物は素謡18番、連吟3番、仕舞12番、独鼓2番の計35番でした。出演者数は、延べ277人となりました。

新企画として、国学院大学観世会による仕舞3番が、招待出演として実現いたしました。

観世流「つづき謡曲会」が国学院大学観世会と交流があり、都築区内での催しに交流出演しておりますので「つづき謡曲

会」を通して出演の打診を行い、承諾を受け事務局会議及び理事会に取り扱いを協議いただき、招待出演として、参加が実現いたしました。



「五流交流のつどい」は連盟規約にても、正会員以外の出演を制限せず、普及活動を計る主旨もありますので、今後も若い人達の参加が多くなる事を期待します。

開催当日の案内掲示物は、作成保存され、横浜能楽堂に保管依頼されておりました物で、追加せずに間に合いました。

「めぐり」は、曲種21枚を追加印刷し、終了後、案内提示物と共に横浜能楽堂に保管依頼しました。

観世流は参加社中も多く、運営担当も各社中に分担をお願い

し、交代は本部担当の方にもお願いし、無事終了いたしました。接待担当もアルバイトを頼まずに、茶菓等はペットボトルのお茶、紙コップ、紙皿、菓子は全て業務用スーパリーにて調達いたしました。

初めての担当幹事でしたが、スタートが遅れましたが、小田切威氏(連盟監事)の大変なご協力をいただき乗り切ることが出来ました。各流派の取りまとめ御担当の皆様改めて感謝申し上げます。

毎回担当の幹事が交代となりますので、引継ぎの会合を設けてルー化する事が望ましいと考えます。



私と能

観世流 篠原 侑子

『お稽古事で、一番難しい物に取り組んじゃったネ』気管支ぜん息、公害医療手帳を持ち歩く様な生活が長い間続いております。私は、体質改善の為に打つ注射も点滴などもまったく受け付けず、かえって湿疹が出てしまい、季節の変わり目には決まらずに息の発作が襲って来ました。どうか自分で治す方法が無いかと、思い悩んでおりましたところ、担当医から声を出す事か水泳など肺の強くなる様な運動に挑戦してみたらと助

言をいただき、一人でも楽しめる大勢のお仲間とも一つになれるお稽古がないかと余り気乗りもしないまま、色々のお教室を見学しました。

そんな中で観世流の田辺竹生先生のお教室を見学(今考えると幸運にも)することが出来、楽器の様な美しい先生の声に魅了されてしまい即入門を決め手続きを済ませました。その時の先生の第一声が冒頭の言葉でした。

竹生先生がお亡くなりになり、ご子息の田辺哲久先生と二代に渡って40年もの長きに、ご指導いただく事に成るとはその時思ってもいませんでしたが、言われた言葉の意味も深くは理解出来ずに、先生の前に座り声を出す事になりましたが、一行謡いだすだけで、セキ込み、その状態が中々治りませんでした。団体のお稽古でしたので、私がセキ込み謡えないからと待たせてくれている事などもちろんありませんでしたが、二、三年ほど経ったある日『あれ今日はセキが出ていなかったかな』なんと気が付かない内に声が出る様になっておりました。

何とか人並に声が出る様になった私は、その頃やっと謡の言葉の美しさ、意味の深さ、登場人物の優しさなどを感じ取る余裕が生まれて来た様な気がしました。お舞台を観ていても、只、

ストーリーが何となく分ると言う程度でしたが、ある時、とても体格の良い演者の舞った羽衣『エエツ』合わない。所が鏡板の前で両手を広げ、左右の型を作った途端『ふわあ』と天上に舞い上がった様に錯覚したので今でも鮮明に覚えております。

世阿弥は、能役者の所作に『幽玄』を求めたとある本で読んだ事がありました。見所での深い理解が、余情を、幽玄を感じるのでは、又その姿勢に共鳴出来る気付きの感覚や能力が観る方に必要とされるのでは、それにより、見るべき物、聞くべき物が舞台の方から飛び込んでくるのではと思っております。が、本当に難しい物に取り組んでしまつたと、そして何と奥の深い優美な物に取り組んできたのだらうと少し誇らしくも思っております。

謡会と料理教室

観世流梅若会 松本 忍

5月、堀内万紗子先生のお家で恒例の夏の会が催されました。う月会、宏英会、宏枝会合。同日頃の成果を発表します。私は父の誘いでお稽古を始め6年程ですが、会にも随分と慣れ、この日も楽しみにしていただきました。というのも、披露する予定のお仕舞『放下僧』は準備万端、

そして事前に親睦会恒例メニュー「ぶりの昆布巻き」作りに初参加しており、その仕上がりが待ち遠しかったからです。

恒例メニューにはいくつかわつて、欠かせないのは三浦玉三朗さんの「あんかけ焼きそば」。これは開始前の昼食として、着いたらまずいただきます。野菜たっぷり塩味で、食べながらお酢やからしを加えると味に変化が出て楽しい逸品です。この日も玉さんは朝から腕を振るいはりきって私も手伝いました。が、キャベツの切り方がおかしかつたようで早々に退場。片付けに徹しました。そして、島幸太郎さんの「ぶりの昆布巻き」。島さんと先生と3人で、事前に半日がかりで仕込みました。

まず昆布を戻して均等に切り、それで一口大に切つたぶりを巻き、楊枝でとめます。「昆布の端が綺麗に揃うように巻いてね。簡単でしょう。」とおっしゃる島さんを見本に、ひとつひとつ丁寧巻いていきます。作業は単純ですが、昆布がつるつるしてぶりが滑るし、そこに気を取られていると端が揃いません。チラッと見ると、さすが島さんの方には綺麗な昆布巻が並んでいます。巻いた後でこっそり端を切り揃えてみましたが、良心が痛み、難しそうなのは島さんにパス！出来上がった後は火にかけて灰汁を取

り、味を調べてゆつくり煮込みます。煮込むのは先生にお任せです。

当日、昆布巻きは好評で、テーブルいっぱいのお料理・お酒とともに親睦会も盛り上がりました。先生はお料理がとてもお上手で、あつという間に完売です。こんな時、私はほろ酔いになりながら、「ああ、またお稽古頑張ろう。」と思うのです。

余談ですが、仕込み途中、ぶりがあまりにも見事だったため、3人で少しお刺身にしていただきました。ビール付き、お手伝いできてよかった、と心から感じた瞬間でした。

山姥の里

宝生流 塚本博理

山姥の里とはどんなところだろうか。一昨年春、山姥の舞囃子を舞うに当たって訪ねてみることにした。能の舞台になっている上路(新潟県糸魚川市)が山姥の里と言われ、史跡のあるところである。上路山村振興センターのHPで山姥の里の紹介とマップを見ることが出来、これを頼りに行くことにした。4月19日のことだった。

高速の北陸道の親不知インターを降り、国道を富山方面に向かうと、新潟県と富山県の県境を流れる境川に出会う。橋を渡

って左折、川沿いに進むと正面に雪を冠った高い山々が見えて上路行きの期待が膨らむ。再び川を渡り東に暫く走って上路の集落に着いた。標高は200メートルほどだが、山間とあつて辺りにはまだ雪が残っていた。

上路は小さな集落ながら、周辺は雪の残る田んぼが広がる平地、近くの山々はなだらなかで、さほど高くはない。雪で白い高い山々は遙か遠くに見えるだけ、謡の詞章から、険しい山また山が近くに望めるだろうと勝手に想像していた景色とは違っていて、案外な感じだった。

史跡の眼目は山姥神社だったが、小さな木の鳥居とその向こうに2つ小さな祠があるだけの、素朴そのものの神社だった。近くに謡曲史跡保存会の駒札が立っていた。

史跡の中には山姥の日向ぼつこ岩というのがあったりで、ちよつと首をひねりたくなつたが、上路に古くから伝わる山姥伝説に合わせて後に史跡らしきものに仕立てられたのだろう。

さて、上路越えを選んだ百万山姥一行はこの先どんなコースをたどったのだろうか。奥に続く山道を走ってみたいところだったが、あいにく集落の奥は雪で通行止め、現地でその先を想像することはできなかった。

上路は、古来通行の難所として名高い親不知とは山をはさん

で表裏の位置関係にあるのだが、あとで親不知で入手した糸魚川市観光マップには、上路から山道を東に向かい、峠を越え、青海川の上流に至り、青海川沿いに下って行き、再び日本海沿岸の青海に出る道が描かれていた。青海は親不知を過ぎたところにある。上路越えとは山また山を越えて信州に入る道のことかと漠然と考えていたのだったが、どうやら難所の親不知を避けた北陸道のバイパスだったと気づいたのだった。

山向こうの上路はまだ冬の名残をとどめていたのに、親不知は桜が満開で春めいていた。

不思議なご縁

金春流 田村淑子

お謡を思いがけないご縁で、游山房の二宮先生に教えて頂く事になったのは、8年前のことでした。二宮先生は一流商社を50歳で退職され、和の文化を伝えるため、ビルの一角に古民家の材料を使った板舞台と和室を作られていました。先生は奈良の薪能や港北ニュータウンの薪能など手がけられ、能の解説もなさる多才な方です。

謡の「清経」をお稽古した時、私の郷里の地名柳ヶ浦が出てきました。そこで平家物語を調べると、清経は月の美しい夜に舟

の上で横笛を吹き納めて「都は源氏の勢に攻め落とされ、九州から惟栄に追い出され憂き事が待ちかまえておろう、わが身もこれまで」と念仏を唱えながら身をひるがえして入水したとあります。

「大原御幸」にも、壇ノ浦で安徳天皇とともに身を投げた建礼門院が、緒方の三郎惟栄への恨みを語るところがあります。その緒方惟栄が私が幼い頃に聞かされた実家のルーツです。

平家物語の「緒環」には、片田舎に住む夫婦に一人娘がいた。ある夜若い男が娘を訪ねて来た。気品があり、その優しい態度に娘は心を惹かれた。そのうち娘は身ごもり、母がお前の所に来る者はどんな男かと尋ねると、来る時は見えますが、帰る時は知りませんと答えた。母は知恵を授けた。いつもの様にその男は水色の狩衣姿で娘の所に現れた。娘は男に悟られぬ様に狩衣の衿に針を刺して、麻糸の玉を結びつけた。男は変わら

ず優しかったが、いつの間にかいなくなり、闇から一筋の糸をたどって行くと、岩屋へたどり着いた。娘は岩屋に向って「姿を見せて下さい」と幾度頼んでも出てこず、中から「私は人の姿はしておらぬ。お前が見たら肝をつぶして驚くだろう。どうか我が子を産んでくれ、その子は男の子だ。剣を取らせば九州

に並ぶ者なき者になるはず」といった。

岩屋の中にはどくろを巻いた大蛇がいた。

生まれた男の子の五代目が緒方の三郎惟栄と平家物語には書かれています。

今も大分県豊後大野市緒方町には言い伝えが残っています。一昨年緒方町を訪ねた折、広場の中に緒方三郎惟栄と彫った大きな石碑があり、お酒や果物が供えられていました。

私がお謡の稽古をしていた事で、実家のルーツも良く分かり、何処にご縁があるか分かりません。

ちよつと寄り道

掃部山界限

喜多流 中嶋雅美

皆様おなじみの横浜能楽堂のある掃部山公園周辺を地元目線でご案内。

まず、桜木町駅から暗いガード下を通るのはなにか鬱陶しい。そんな時にはちよつと気分を変えて、音楽通りを通ってみませんか? 通りの中ほど、本町小学校の前に一基のガス灯が立っています。ここは1872(明治5)年にフランス人技師アンリ・プレグランにより日本で初めてガス会社が出来た場所です。当時、神奈川県庁付近か

ら本町通りまで、ガス灯が十数基設置されたそうです。因みに、本町小学校では昔から冬にはガストーブで暖を取りました。

急な紅葉坂を登ると青少年センターの横に「神奈川奉行所跡」の碑が立っています。神奈川奉行所は1859（安政5）年に設立され、「戸部役所」とも呼ばれました。開港間もない横浜で、行政事務や外国人遊歩区内の風俗取締、裁判や農民・町人の出願事項の受付処理などを行っていました。しかし、もし

万が一、外国と変事が起きた際には、横浜の町を見下ろすことが出来る土地柄、城塞へとその機能を変えることが容易だったので、この地が選ばれたようです。能楽堂から海とは反対方向に、10分ほど歩くと「暗闇坂」と呼ばれる場所がありますが、そこは当時の神奈川奉行の宿舎のそばで、牢獄や処刑場があったそうです。今は公園になっていますが、少し前までは薄暗い不気味な坂でした。

この掃部山一带は江戸時代には「不動山」、明治に入ってから「鉄道山」と呼ばれていました。新橋横浜間に初めて鉄道が敷設された時にこの地が事業拠点となったからだそうです。1882（明治15）年頃に旧彦根藩の士族らがここを買収し、「掃部山」と呼ぶようになりました。伊井掃部頭直弼の銅像は

1909（明治42）年に横浜開港五十周年を記念して建てられました。第二回大戦中の金属回収令で取り払われ、現在の銅像は1954（昭和29）年に横浜市が開港百周年を記念して再建した二代目になります。1914（大正3）年に伊井家がこの地を横浜市に寄付して以来、公園になりました。

春には桜、夏には「虫の音を聞く会」、年間を通して能楽堂でのお能と、いろいろ楽しめる掃部山公園、近所には他にも、御所五郎丸のお墓や、幕末から明治にかけて隆盛を誇った「岩亀楼ゆかりのお稲荷さん」など、もつとご案内したい場所もごさいますが、それはまた次回、チャンスがありましたならば。

「能」との出会い

金剛流 篠原寛美

子供の時に、テレビの時代劇で武将達が舞っている姿を見て、「カッコいいな」と思ったのが、能の第一印象でした。その頃から、「いつかは自分も舞ってみたい」という思いが、芽生えていたのかも知れません。子育てでも落ち着きつつあり、何か新しい事を始めようと考えていたところ、横浜能楽堂で「初めての謡・仕舞教室」がある事を知り、参加しました。

ツヨ吟とヨワ吟の音域の違いや、役柄・位によって謡い方も仕舞の所作も変わる事などが、ややこしくて難しいけれども、面白いと感じました。本舞台での発表会では、出来はともかく、楽しく、気持よく舞う事が出来ました。これを機に、能の事もつと知りたいと思うようになり、もつと謡ったり舞ったりしなくなりませんでした。教室終了後は、豊星会でお稽古をさせて頂ける事になりました。



それから早十年近く経ちましたが、能を楽しむ気持ちを忘れず、お稽古したいと思えます。いつか「かつこよく」舞える日が来ることを夢見ながら。

能楽堂だより

二十五年九月以降の公演案内

二十五年九月二十六日（土）の横浜能楽堂の公演予定は、次の通りです。このほか毎月第二日曜日に「横浜能楽堂普及公演」横濱狂言堂」を開催いたします。

第三十回横濱かもんやま能

十一月十六日（土）

午後二時開演

能楽師による実技と解説

柴田稔 筈井賢一

狂言「千鳥」（大蔵流）

能「楊貴妃」（観世流） 茂山正邦

能「楊貴妃」（観世流） 観世鏡之丞

S席四千元、A席三千五百円

B席三千元

チケット発売日

九月二十一日（土）正午から

（初日は電話・webのみ）

企画公演「時々の花」

第一回 九月一日（日）

午後二時開演

能「敦盛」（金剛流）金剛龍譚

第二回 十月二十六日（土）

午後二時開演

能「井筒」（観世流）梅若紀彰

第三回 十二月二十一日（土）

午後二時開演

能「檜垣」（観世流）野村四郎

各回とも 解説 馬場あき子

セット券／S席二万五千元
A席一万三千元
B席一万一千円
単独券（第一回・第二回）／
S席五千元、A席四千五百円
B席四千元
（第三回）／S席八千元
A席七千元、B席六千元
チケットは完売

特別公演

一月二十五日（土）午後二時開演

狂言「富士松」（和泉流）野村萬

能「恋重荷」（観世流）

観世鏡之丞

S席七千元、A席六千元、

B席五千元

チケット発売日

十一月九日（土）正午から

（初日は電話・webのみ）

《編集後記》

△横浜能楽連盟会員数は平成25年4月1日現在435名となり、前年度から16名増加したと巻頭言および連盟報告に纏められた。喜ばしい限り。
△「横浜音祭り2013」の連携イベントに応募することについて話し合われた。能の普及、愛好者の増加に資することを期待する。